

平成26年度

奈良県公立学校優秀教職員  
表彰実践事例集

平成27年2月

奈良県教育委員会

# 目 次

## 【小学校】

### 生徒指導の部

- 1 児童や保護者の思いに寄りそって ～保護者との連携～  
天理市立前栽小学校 教諭 木岡 明美 1

### 地域との協働の部

- 2 地域とともに歩む ～「ゆずりはコミュニティ」の推進～  
香芝市立真美ヶ丘東小学校 教諭 若狭 保 3

### 学校教育目標の具体化の部

- 3 魅力ある学級・学校づくりを目指して  
～感謝の心で「学校が好き・ふるさとが好き」と言える子に～  
天理市立櫟本小学校 教諭 牧山 文美 5
- 4 やる気を引き出す体づくり  
生駒市立生駒南小学校 養護教諭 徳永 詳子 7
- 5 「生きてはたらく言葉の力」を育むための系統立てた指導法の確立と  
若手教員の実践力の育成  
高取町立たかむち小学校 教諭 浅井 真紀 9

## 【中学校】

### 生徒指導の部

- 6 地域とつながる生徒指導  
五條市立五條中学校 教諭 長谷 豊 11

## 【高等学校】

### 学習指導の部

- 7 学科改編に伴う教育課程の編成及び魅力ある学校づくりの取組について  
奈良県立山辺高等学校 教諭 西岡 善史 13
- 8 魅力ある専門学科づくりに向けた取組について  
奈良県立磯城野高等学校 教諭 井上 雅之 15

### 部活動の部

- 9 部活動を通して「自ら考える力」を育成する指導について  
奈良県立奈良高等学校 教諭 中辻 和宏 17
- 10 科学力を身に付けさせる科学部の指導について  
奈良県立奈良北高等学校 教諭 木村 浩美 19

### 学校教育目標の具体化の部

- 11 専門高校における本県産業教育の推進について  
奈良県立奈良朱雀高等学校 教諭 花谷 隆 21

## 1 実践内容

まず、年度当初、新しい環境に大きな緊張や不安を抱えるAさんがいた。昨年度も年度初めがそうで、特に1学期が大変だったが、2学期、3学期とやっと軌道に乗り、落ち着いてきたころにまた、クラス替え、担任の交代という新しい環境がやってきたのである。

そんなAさんと初めて出会い、とにかく心配なことが出てきたら、私に伝えるように言い、学校から帰る前には、不安なことが残らないよう十分に話してから帰らせるようにした。しかし、家に帰ると明るくなる日についての新たな不安や前の日の気になることが、Aさんの頭に浮かんでくるのである。

また、保護者と話をさせてもらったところ、初めて集団生活に入った幼稚園の頃の話から、当時の保護者の不安な思いと経験、それから現在に至るまでのいろいろなお話をとめどなく話してくださった。その思いを大切に、Aさんが、無理なく少しずついいから自分で友達とのやりとりがスムーズにできるよう見守り、つまずいたときには相談に乗り、自分で解決していけるようサポートしていくようにした。Aさんの保護者も、たまたま毎日学校に来られる用事があったため、下校時にその日一日のいろんな話ができた。そして、保護者とともにAさんが不安に思いそうなことを予想し、次の日の朝送り出してもらう時の手立てや学校での対処について相談した。年度初めの心配な時期にそれを毎日続けることで、家から学校への道が、スムーズにつながっていくことになった。

次に、年度当初、自分に自信が持てないBさんは、「ぼくって、『がんばろう』1個もないかなあ。」と、何度も聞きに来た。通知票の『がんばろう』のことである。そんな時「どうして。褒めることはあっても、『がんばろう』は、今のところ1個もないよ。だって、いつもお話聞くととき、目が合うし、いい姿勢でお話聞いてくれてるもん。」と言うと、ニコッと笑顔になって遊びに行くのである。

彼は、カッとになると感情が抑えきれず、すぐに手や足が出てしまうところがあった。そんな中、他のクラスのCさんとトラブルになり、その両方の保護者と連絡をとり事情を説明することになった。Cさんのご両親は、Cさんのコミュニケーション能力のことを常に心配されていたのと、以前に強く頭を打ち、経過観察中であったことも心配を増幅させ、「とにかく、安心して学校に行かせられる環境をつくってもらわなければ困る。」とのことであった。その日のうちにCさんの担任と家庭訪問し、事情を初めから丁寧に説明した。その中で、Cさんの保護者が、今まで抱えてこられたお子さんに対する不安やしんどさ、いろいろな思いを長い時間をかけてじっくり聞かせていただき、その思いをしっかりと受け止めた。そして、Bさんの指導とその保護者の家庭での関わり、学校での見守りと迅速な対応を約束した。



一方、Bさんの母親からは、今までの謝るばかりだったことのしんどさや保護者としての戸惑い、子育ての悩みなど、途方に暮れておられた気持ちをすべて話していただくことができた。最後には、「初めて、本音を言うことができた。気が楽になった。一緒にやっていってもらえるなら何とかがんばれそう。」というお言葉をいただいた。

さらに、父母と生活できず、祖父母と一緒に暮らしているDさんがいた。家庭訪問では、まわりの親と世代の違う者の子育てについて、これでいいのかと祖父母が常に悩みながら日々暮らしておられることや、父母との関係や事情などをゆっくり聞かせてもらった。その中で、私が日々大事に思い、子どもと関わっていることが、祖母の日々の子育てとびったり重なり、世代が違ってもしっかり思うこと、大切にしたいこと、大切にしなければならないことは変わらないんだということを経験するいい機会となった。

その後、Bさんとトラブルがあり、この祖父母に心配をかけることが起こった。事情を説明すると、その前にも子育てをはじめ、いろんな話をしていたこともあり、良く理解し許してくださった。謝るばかりで気持ちが滅入っておられたBさんの保護者が、謝りの電話を入れられた時に、「自分も息子の時に謝る側で、謝る方の気持ちが痛いほどわかるから。」と、逆にBさんの保護者を励ましてくださった。私もBさんの保護者も気持ちが救われた。

そして、こういったやりとりや思いの共有を通じて、Cさんの担任をはじめ同僚にも、子どもや保護者への向き合い方を伝えていった。

## 2 成果と課題

常に相手の立場に立って思いをめぐらせ、考え、家庭訪問や電話でとにかく時間をかけて直接とことん話をした。その結果、家庭との関係が深まり、子どもや保護者に安心感を生み、また、学校の対応への理解や協力を得ることにつながった。また、校内では、同僚や上司と話し合ったり相談したりしながら、どんな時も笑顔を忘れず、相手の気持ちになり、あたたかい気持ち、あたたかい言葉で保護者と関わり、その思いや気持ちに寄りそっていくことの大切さを伝えることができた。

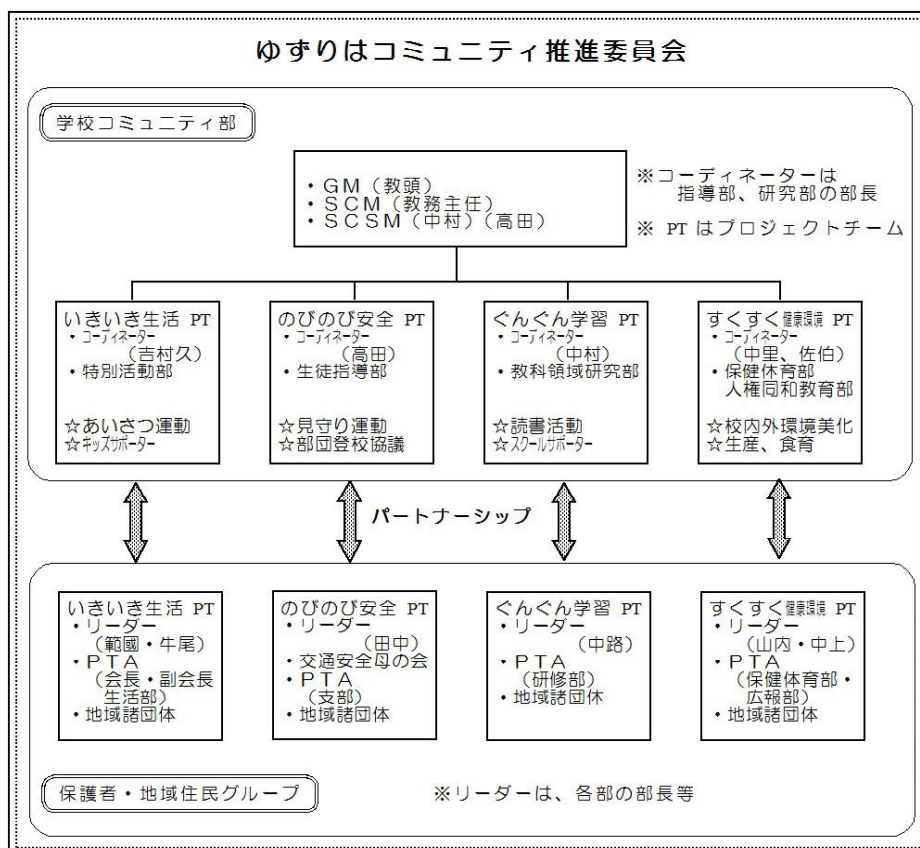
しかしながら、保護者や社会の価値観が多様化する中、ともに歩む気持ちを共有できるまで話し合うには、あまりにも時間がないということが問題である。また、どんな家庭状況であっても、善悪の判断ができる子どもに育てるために、どのように家庭に関わっていけばよいかこれがこれからの課題である。

1 実践内容

在任校である香芝市立真美ヶ丘東小学校において、地域との協働を推進するに当たり、学校コミュニティを「ゆずりはコミュニティ」と名付けて取組を進めた。「ゆずりは」は本校のシンボルともいえる樹木であり、またその特徴（ユズリハの名は、春に枝先に若葉が出たあと、前年の葉がそれに譲るように落葉することからきているとされる。その様子を、親が子を育てて家が代々続いていくように見立てて縁起物とされ、正月の飾りや庭木に使われる。）から、地域の中心となる学校コミュニティを表すのにふさわしい名前だと考えた。



本校では以前より、地域と連携したいくつかの取組を行っていたため、まず、それらを踏まえての組織化を進めるところより始めた。「ゆずりはコミュニティ」の推進委員会を、学校コミュニティ部と保護者・地域住民グループから組織し、それぞれにおいて4つのプロジェクトチーム（以下PT）をおいた。4つのPTは、「いきいき生活PT」「のびのび安全PT」「ぐんぐん学習PT」「すくすく健康環境PT」と名付けた。学校と保護者・地域住民グループにおける各PTの担当者が熟議を重ねることで、よりよい活動を検討していけると考えている。



ゆずりはコミュニティ組織図

「いきいき生活PT」は、学校コミュニティ部では特別活動部が中心となり、あいさつ運動やキッズサポーター（児童が中心となって行う校内奉仕作業）などの活動を行った。あいさつ運動は計画委員会児童や教職員を中心として校門前で実施し、香芝市が行っている「ニコニコあいさつの日（毎月25日）」運動とも関連付けて取り組んだ。キッズサポーターは家庭訪問日の午後、希望する児童により、校舎内の壁のペンキ塗りを行った。

「のびのび安全PT」は、生徒指導部が中心となり、登下校における見守り運動や部団登校班編成協議などの活動を行った。見守り運動は、地域の方やPTAの方を中心に安全パトロール隊を結成して実施した。年度の終わりには、感謝の気持ちを伝えたいと、児童が感謝状を贈ることになった。

「ぐんぐん学習PT」は、教科領域研究部が中心となり、読書活動やスクールサポーター、ゲストティーチャーを招いての取組を行った。図書館ボランティアに協力いただいている「えほんのひろば」を実施したり、老人会や地域の方によるゲストティーチャー授業などを学年に応じて設定することができた。



えほんのひろば

「すくすく健康環境PT」は、保健体育部と人権同和教育部が中心となり、校内外環境美化や生産、食育に関する活動を行った。人権の花運動や、香芝市「かしば女性会議」による環境カルタの取組、PTAによるドッジボール大会などの活動を進めた。

上記の取組を学校コミュニティ協議会で報告し、委員より出た意見をもとに、次年度の取組検討に活用している。

## 2 成果及び課題

これまで本校が行ってきた地域との連携に関する取組を、組織化を通じて明確にすることができたことが大きな成果であったと考えている。それにより、新たな方向性や取組を検討しやすくなった。例えば、「のびのび安全PT」としての活動内容を明確にすることにより、これまで、登下校の安全について、学校が行ってきたこと、地域に提供していたことがはっきりとし、それを踏まえ、今後どのように登下校の安全に取り組めばよいかのわかりやすくなった。これまで、学校が行ってきた部団登校班編成に地域の声を反映する等、新たな取組の検討を進めている。

4つのPTを組織して活動したが、学校と地域が熟議を行う場の設定が難しかった。そのため、学校主導の活動になりがちであった。学校コミュニティ協議会委員からも、「学校コミュニティが様々な活動のスイッチを入れるムーブメントの一つとなってほしい」という意見をいただいております、学校と地域がよりよい取組を目指して熟議を重ねる場の設定を進めていきたい。

## 3 その他参考となる事項

香芝市立真美ヶ丘東小学校ホームページ

[http://www.city.kashiba.lg.jp/mamigaokahigashi\\_s/](http://www.city.kashiba.lg.jp/mamigaokahigashi_s/)

## 分野番号 7 小学校 学校教育目標の具体化の部

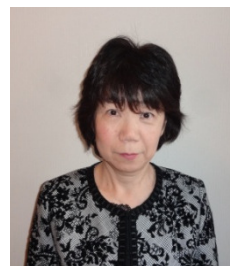
魅力ある学級・学校づくりを目指して

～感謝の心で「学校が好き・ふるさとが好き」と言える子に～

天理市立櫛本小学校 教諭 牧山 文美

### 1 実践内容

本校では「櫛本の歴史と自然に学び、感謝の心と笑顔を忘れず、誇りを持って逞しく生きていく児童を育成する」と教育目標をかかげ日々取り組んでいる。教務主任、学級担任として、教師も子どもも笑顔で、意欲に燃えて「学校が好き・ふるさとが好き」と言える学級・学校作りを進めてきた。教師間のつながり、教師と子ども、学校と家庭・地域とのつながりを大切にして取り組んだ概要を報告したい。



#### (1) 地域とつながる体験活動でふるさとを愛する子に

##### ① 学校・家庭・地域一体となった「埴輪祭り」

櫛本小学校の校区には多くの古墳があり埴輪の里と呼ばれている。「埴輪」をキーワードに地域と一体となって行っているのが「埴輪祭り」である。5年生は夏に埴輪を作り、この埴輪を使って冬の「埴輪祭り」で野焼きを行う。校区ウォークラリーでは、6年生が校区の神社仏閣など歴史的なポイントで下級生や地域の方に紹介を行う。地域の魅力発見・発信の場である。翌年の夏の「燈花会」で埴輪が並べられ、運動場一面に広がる埴輪の絵の幻想的な輝きが人々の心を楽しませる。子どもたちは「埴輪祭り」が大好きである。地域の「埴輪祭り実行委員会」と「校内埴輪祭り実行委員会」また教師間との連絡調整をしながら、学校が地域とつながり、ふるさとを愛し誇りに思う子どもを、みんなで育てていることを実感している。



「はにわ祭り」火入れ式

##### ② 5年生「米作り体験」

5年生の社会科と総合の時間に「米作り」の体験をさせた。田植えや稲刈りを通して、子どもたちは米作りの大変さや先人たちの苦勞・偉大さを知るとともに、「食」をささえる人たちに感謝の気持ちを持つことができた。お世話をしてくださった地域の吉本さんに、おにぎりや自分で作った「川柳集」を届けた。また、自分たちの田んぼに案山子の「はにワン」を設置して地域の方に喜んでもらい、今、本校のマスコットキャラクターとして学校の人気者になっている。

#### (2) 規範意識を持ち、マナーある行動ができる子に

子どもの規範意識を高めることは重要な課題である。道徳の時間はもとより様々な学習活動の中で、きまりを守ろうとする意欲、規範についての知識、実践力を高めてきた。校外学習は、社会のルール・マナーを教えるにはよい機会となる。公共機関や公共の場での態度、説明・案内していただく人たちの立場にたって考えることにより、感謝の気持ちを持ち、自分たちのとるべき態度について考えさせ実行させた。自分の行動や学んだことのお互いの振り返りを行うことによって、さらに意欲を高める工夫をした。4年生での社会見学やならまちウォークラリー、5年生での宿泊訓練で

は、事前の指導を通して、ルールを守り、協力して行動することができた。グループ行動により、協力してルールを守りながら活動する力を高めた。事後指導では、学びをグループごとにまとめ、発表したり、お礼の手紙を書いたり充実感を持たせて次の意欲づけにつなげた。

### (3) 感謝の心を持ち、人の役に立つことに喜びを感じることができる子に

「ありがとう」をキーワードに、4年生の最後の授業参観には「二分の一成人式」を行った。家族に感謝の気持ちを伝えるとともに夢を語りこれからの努力を誓った。保護者の方からも涙ながらに喜びの言葉を伝えていただいた。2年生への「給食当番のお手伝い」では高学年として進んで手伝い、片付けに行く姿が日常的に見られるようになった。「分団登下校」では、下級生の世話をしながら安全な登下校に注意する力を付けていった。「6年生を送る会」では全ての企画・運営をし、6年生に喜んでもらえるよう、感謝の気持ちをこめて感動の送る会を演出することができた。



二分の一成人式

### (4) 自分の役割は責任をもって果たし、主体的に行動できる子

小学校6年間と中学校への縦と横のつながりを意識して、主体性を育てる楽しい活動を進めた。4年生の「クリスマス会」では、二人の児童がクラス全員分のサンタクロースの三角帽子を作ってくるなど、サプライズがあり大いに盛り上がった。5年生では「ハロウィンの仮装大会」を企画し仮装大賞を決めた。投票の結果、資金0円すべて手作りで、しかもそっくりのアンパンマンが選ばれた。また国語科で「わたしたちの『図書館改造』提案」を学習した後、「5年1組改造提案」を書かせたが、「5年1組を明るく華のあるクラスにするために」や「休み時間に教室に一人も残らず運動場で遊ぶようにするために」など面白い提案が出され実行されていった。

### (5) 学校評価の活用

教務主任として、学校の取組や子どもの変容を的確に捉え、P D C Aサイクルで教育改善ができるように、項目内容の検討など学校評価の効果的な活用に努めた。

## 2 成果及び課題

平成24、25年度児童の意識調査・学校評価の結果では、「学校が楽しい」「みんなで何かをやるのが楽しい」など肯定的な回答が高くなった。豊かな体験活動や子どもの自尊感情や規範意識を高める指導と取組が、成果をあげることにつながったと考える。子どもたちへの質問で「あなたが学校を誇りに思うことはどんなことですか」という問いに、「埴輪祭りを地域の方と行っていること」「古い歴史や建物があること」「みんながやさしいこと」などたくさん回答するようになったこともうれしい。

今後は、自己点検・学校評価を活かしながら、子どもたちがふるさとに誇りを持ち、仲間と協力して楽しい学校・学級作りをする「主人公」としてがんばってくれるよう、教務主任としてのリーダーシップを発揮できるよう、さらに研鑽を積み上げていきたい。

## 3 その他参考となる事項

天理市立櫛本小学校ホームページ <http://ed.city.tenri.nara.jp/ichinomoto-el/>

1 実践内容

保健室から見て、「まっすぐに立ってられない子」「すぐに転ぶ子」「転んでも手がつけない子」「物が飛んできて、よけられない子」「物によくぶつかる子」など、不器用な子どもが多くいる。学級でも、「落ち着かない子」「話が聞けない子」「人とうまく関われない子」「トラブルが多く、反抗的な態度をとる子」などが見られ、気になる子どもが増えてきているように感じる。



そのような子どもたちをどのように支援していくべきか、関西国際大学の中尾繁樹先生に巡回相談に来ていただき、助言を受けた。当初は助言を受けても、その学級だけの取組だけに終わり、継続的な取組には至らなかった。そこで、本校の子どもたちの体や人との関わりの不器用さを把握し、体づくりを中心に学校全体としての取組をしていくために、プロジェクトチーム「G n P（ぐんぐん のびろ プロジェクト）」を立ち上げ、平成24年度末より取り組んだ。

(1) 子どもたちが楽しみながら体を動かせる環境づくり

- ・中庭にケンパの線を描く。
- ・中庭から運動場への通路にラダーを描く。
- ・渡り廊下にジャンプの的をぶら下げる
- ・運動場の体育倉庫の壁にストラックアウトの的を描く。
- ・青竹ふみを各教室に置く。
- ・体育館の壁にジャンプの目標となるキャラクターを貼る。
- ・ホースでフープを作る。 など



(2) 「今月の動き」

月初めにある「さわやか朝会（全校朝会）」で、G n Pメンバーが「今月の動き」の紹介と何を鍛える運動かを子どもたちに話し、その運動を毎日の朝の会で継続して行う。

月	今月の動き	目的
5	すわってバンザイ	骨盤を起こして正しい姿勢を作る。
6	かかとつま先バランス	左右の足のかかととつま先をつけて立ち、目を閉じて30秒間静止することでバランス感覚を養う。
7	コキコキ クネクネ	体を腰から下、腰から胸、胸から上に3分割して動かし、体の軸を鍛える。
9	水平バランス	片足で立ち、上半身を床と水平にして、バランス感覚を養う。
10	カヌーこぎ	肩から腕を回し、肩甲骨を動かす。投げる運動や、走の運動につながる。
11	Z（ゼット）	床に膝立ちをし、腕を前に伸ばす。体を一直線にしながら後方に倒し、Zの形で静止することで、体の軸を鍛える。
12	うしろでパッチン	二人背中合わせに立ち、足を動かさずに上半身をひ

		ねり、相手と手のひらでタッチすることで、体の軸を鍛える。
1	ナンフー体操	カンフーと太極拳の動きを取り入れたオリジナルの体操である。ゆっくりとした動きと、体を支えて静止する動きで、重労働筋（身体を保持したり、ゆっくり動かしたりする筋肉）と体の軸を鍛える。
2	よつんばいバランス	よつんばいで反体側の片手片足を上げ、体の軸を鍛える。

### (3) 体育の授業の中での体づくり

- ・授業の導入に体の軸を鍛える運動やサーキット運動を取り入れる。

### (4) 学校生活の中での体づくり

- ・クラス遊びや縦割り遊び、スポーツ集会の時に、昔遊びや体の軸を鍛える運動などをいれる。
- ・授業の始めに「机ツバメ（机に手をつき、ツバメのポーズをする）」や「10秒間かけてゆっくりすわる」をする。（1年） など

### (5) 体重測定時の保健指導

- ・姿勢の話や、体の軸を鍛える大切さを話し、実際に運動を行う。

### (6) 個人カードの作成

### (7) 研修会の開催

- ・中尾繁樹先生を招いての研修会及び勉強会を開催する。

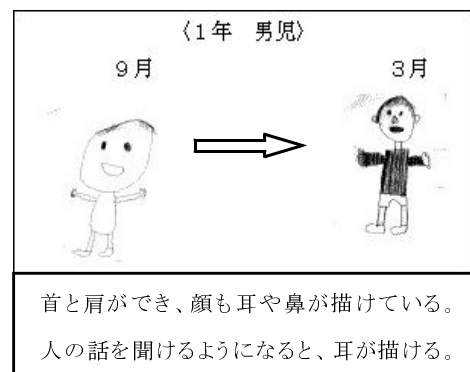
## 2 成果及び課題

ケンパやジャンプの的などは、子どもたちに好評で、気軽に遊んでいる姿がよく見られる。今月の動きも、毎日朝の会に行くことで定着してきている。ナンフー体操は、1～2月の朝休みと中休みに自由参加で行ったが、低学年を中心に誘いあう姿が見られた。寒い時期には、体を動かす遊びが少なくなりがちであるが、運動の苦手な子どもたちも多く参加していたことは有意義であったと思われる。

これらの取組を通して、少しずつではあるがけがでの保健室来室者が減り、日本スポーツ振興センター適用のけがの発生率が減少した。また、グッドイナフ人物画検査でも、体づくりをしたことにより、ボディイメージが高まり、伸びが見られた。さらに、授業の始めに「机ツバメ」などをするることにより、学習に向かう構えができたことも大きな成果である。

今後も、環境づくりや体づくりの運動を継続し、子どもたちが楽しんで取り組めるように工夫をしていきたい。

また、幼稚園との交流を図り、一緒に体づくりの取組を進めていきたいと考えている。



## 3 その他参考となる事項

### 参考文献

- 「子どもの特性を知るアセスメントと指導・支援」 中尾繁樹 明治図書（2009）  
「不器用な子どもたちの感覚運動指導」 中尾繁樹 明治図書（2013）

## 分野番号7 小学校 学校教育目標の具体化の部

### 「生きてはたらく言葉の力」を育むための系統立てた指導法の確立と 若手教員の実践力の育成

高取町立たかむち小学校 教諭 浅井 真紀

#### 1 実践内容

平成20年度、高取町内の2小学校が統合となり「たかむち小学校」が開校。「心豊かに、自ら進んで学び、たくましく生きる子どもの育成」の学校教育目標のもと、様々な取組を行ってきた。その中で、本校児童の課題は「コミュニケーション能力の向上」であることが明らかとなり、研修主任として、そのための系統立てた指導法の確立に取り組んできた。



また、現代の教育界において急務ともいえる若手教員の実践力向上を目指した取組も積極的に行ってきた。

##### (1) 全教職員の共通理解のもと、児童の「生きてはたらく言葉の力」を育む

コミュニケーション能力向上を目指した取組を進めてきたにもかかわらず、語彙の乏しさ、表現スキルの未熟さという課題がなかなか払拭できなかった。その背景には、校内に系統立った具体的な指導計画がなく、個々の実践に頼っていたという経緯があった。

そこで、児童が実生活に生きてはたらく言葉の使い手となるため、研究主題を「生き生きと表現し、高まり合う子を目指して」とし、研修主任として自らの実践を基盤にした「言語環境の整備」「言語活動の充実」についての系統立った指導内容・指導法を提案し全校に広め、全教職員が一丸となってそれに取り組む体制を確立させた。

まず1年次、本校児童の言語についての課題を踏まえ「児童に付けたいコミュニケーション能力」（国語科の3領域の学年到達目標をベースにしたもの、身に付けたい話型など）を設定し、国語科だけでなく全ての教育活動全般において言語活動を意識した取組を積極的に行った。

2年次は、語彙や表現を豊かにするためのより具体的な指導法について研修を深めるため、研修教科を国語科に限定し、授業公開や講師を招聘しての研修を設定した。

3年次、国語科で培ったスキルを他教科で積極的に活用する授業づくりを進めた。県教育委員会の指導主事や県国語教育研究会の先生方を講師として招聘し、全学年が研究授業を行う体制を整えた。また、指導案に「本単元で扱う言語活動」の項目を作り、学習指導の中で行う言語活動について明記し、それに伴い授業評価の観点も明確化させた。

そして4年次、平成27年度に県道徳教育研究大会会場校として公開授業を行うに当たり、研究主題を踏襲しながら、副題を「言語活動の充実を基盤とした『生きる力』を育む道徳授業の構築」とし、道徳の授業において言語活動を有効に活用する指導を充実させるべく実践を重ねている。県の指導主事や畿央大学教育学部現代教育学科教授の島恒生氏を講師



として招聘し、全学年が研究授業を行うほか、授業作りの研修を自主的に開催するなど、研修体制は年々確実に充実してきている。

## (2) 若手教員の実践力向上を目指して

現在、本校は約4割が教職経験10年未満の教員で、今後さらに加速度的に若手教員が増加することが予想される。そこで、若手教員が学級経営だけでなく校務全体のことを考え、積極的に職務に励もうと思える雰囲気づくりを目指した。まず、ベテラン教員が示範授業や実践・教材の紹介を積極的に行いながら、若手教員が研究授業や自主的な公開授業を進んで行う校内体制を整えた。また、ベテラン教員と若手教員が忌憚なく意見を交流し合える場として、授業後の研究協議を少人数グループ形式で行い、若手教員が受け身にならず積極的に意見を出せるようにした。さらに、校長の指示のもと、校務分掌においても責任のあるポジションに若手教員を積極的に配置（平成26年度校務分掌において、3主任が30歳代前半～半ば）、ベテラン教員が随時サポートできる体制をとることで、若手教員が責任感をもって校務に従事する体制を確立した。

## 2 成果及び課題

自らの実践をもとに「児童に付けたいコミュニケーション能力」を設定したり、「声のものさし」等の視覚に効果的に訴える掲示物をすべての教室に掲示したりしたことで、全教職員が共通理解のもとの確かな指導を行えるようになった。全学年・学級において、授業だけでなく学級指導や特別活動等においても常に言語活動を意識した指導が展開され、校内の言語環境も整備していった結果、「みんなの前で表現したい」と思える児童、基本話型を使いながらきちんと伝えられる児童が増えており、児童のコミュニケーション能力は確実に向上しているといえる。



また「道徳における言語活動の有効活用」の研究にも余念がなく、現在取組半ばではあるが、教材研究や指導案作成等の学年会議を積極的に行い、全教職員が個々のスキルアップを図っている。

一方、職務の多忙化によりベテラン教員が若手教員に指導のスキルや「教師道」なるものを伝承する機会もままならないが、若手教員の積極性を確実に高めることで、時間や労力を有効利用しながら「教師はプロである」ということをしっかりと認識させることができていると考える。その成果として、本校では若手教員の多くが研究授業を自ら希望し、研究授業後のグループ協議でも率先して司会進行やまとめの発表をしている。校務分掌においても、これまでの取組を踏襲しつつ新しいことにも挑戦しようとする意欲的な姿勢が見られ、それをベテラン教員が陰になり日向になりながらサポートする協力体制が確かなものとなっている。また、若手教員同士で互いに切磋琢磨し合い、さらに実践力を伸ばしている。

研修とは「気付きと感動を通して学ぶ」ことであり、教育には「感性」が重要であると聞いたことがある。研修主任という立場から、若手教員を含めた全ての教職員が「感性」を磨き、やり甲斐と誇りをもって目の前の児童の明るい未来のために尽力する教師集団の形成に、これからも微力ながら取り組んでいきたい。

## 1 実践内容

本校の生徒は、男女を問わず無邪気で、あいさつ励行を心がけ親しみやすく素直な面がみられ、落ち着いた学校生活を送っている。しかし、何事に対しても自分から進んで考えたり行動したりするという力が弱い。そこで、学校は、地域の方々と共に子どもたちを育てるという視点に立って、学校、家庭、地域が連携し「参画・協働」する取組を通じて、生徒が規範意識を高めつつ意欲的に活動する機会を多く設けた。



### <具体的取組>

#### (1) 避難所設置防災宿泊訓練

3年前より学校・自治会・保護者が計画を立て、避難所設置訓練を取り入れた防災訓練を行っている。参加生徒は、生徒会が呼びかけ、毎年約15名前後の参加者になる。生徒たちは、まず自分の命を守ることを第一に、「助けられる人から助ける人へ」をスローガンに活躍した。人数確認・施設の案内・パーティーの組み立て等避難所設置訓練をこなし、その後の救命救急訓練に積極的に取り組むことができた。



#### (2) ゆかた着付け教室

重伝建に指定されている新町通りにあるまちなみ伝承館において、地域の着付け教室の先生方を外部講師としてむかえ、日本の着物文化とゆかた着付けの授業を2年家庭科と総合の時間で設計した。生徒たちは、地域の先生からゆかたの由来やその作り方、そして日本語になっている「襟を正す」「しつけ」は着物文化から派生している言葉であることを作法やマナーとともに学習している。最後にお礼を言うときに生徒たちが自主的に正座をし、礼儀の面でも成長した姿を見ることができた。

#### (3) 文化財に親しむ

一年生は、地域の登録有形文化財である藤岡家住宅の修繕保存への思いや願いを地元NPO法人「うちのの館」の方々から教わった。その後、学芸員の方に用意した質問に答えていただき、住宅を案内していただいた。住宅内には、貴重な展示物が手の届くところにたくさんあったが生徒たちは、マナーを守りながらしっかり説明を聞いた。その後、自分の印象に残った場所などをスケッチした。スケッチは、法人の方にはがきやポスターにさせていただき、地域の伝統や文化財を大切にする心の啓蒙に役立った。

#### (4) 登下校指導

登校時には、教員とボランティアの生徒たちが元気な声で生徒たちの登校を迎えている。また、下校時には、全教員で生徒たちの下校を見守り、大きな声で挨拶が交わされ一日が終わるといった取組を行っている。

下校時における校門立哨は、地域の方々によっても定期的に行われている。通学路では、声かけをしながら生徒たちの様子を見守ってくださる方が多く、生徒たちも地域の方々の後ろ姿を見ながら成長している。



#### (5) 花いっぱい運動

以前は、生徒会の役員が市販の花を購入し花いっぱい運動を行っていた。今年度より生徒会の呼びかけで花いっぱい運動への参加者を募集して行った。そして、地域の方々にいただいたひまわりの種を蒔き、欠かさず水やりを行い種から大きな花を咲かせることができた。ひまわりは、グラウンドと市道に接する場所約50mの間に咲かせたので地域の方々にも好評になり、『ひまわりロード』として道行く方々にも「きれいやな」「毎年してや」と喜ばれている。この取組を通して、命の大切さや規範意識の高揚が現れてきた。



今後、種を収穫し地域の学校や地域の方々にもらっていただく計画をしている。

## 2 成果及び課題

学校と地域の人々や保護者とともに活動したり学んだりすることで、生徒が地域の人々の願いや思いを知ることができた。そして、人々の見守りや情熱的な思いが生徒の規範意識を高め礼儀やマナーを守る行動に現れてきていると感じている。また、これらの活動は五中生を知ってもらうきっかけとなり、地域の方々との関係が深まってきた。今後、これらの活動を通してより活発にし、地元のすばらしさを感じとり、地域の学校としての誇りと地域に愛される学校の一員としての自覚をもって学校生活を送れる生徒を育てていきたい。

## 1 実践内容

本校は、昭和10年に地域を担う青年を育成する目的で開かれた修練場「豊農塾」を前身として開校、本年で創立68年目を迎え、平成7年度から奈良県唯一の総合学科を設置したが、近年は入学志願者数の大幅な定員割れが続いている状況であった。そこで、これまでの学科編成や教育課程の現状を評価・整理し、教育課程や教育内容、指導方法の工夫・改善を行うとともに、様々な進路希望や学習ニーズをもつ生徒が学んでいる現状を踏まえ、教育内容や指導方法の工夫・改善を行い、より一層特色のある学校づくりを目指して具体的方策を検討した。



### (1) 学科改編

平成25年度からの学科改編に伴い、本校の特徴である地域との連携を最大限に進めるため、今後一層地域とつながった事業を展開し、地域の力を活用し、生徒の伸長につなげられるよう、教務主任として学科改編の計画・立案に携わり、これまでの総合学科から普通科と農業科に学科改編がなされた。普通科には「学びの開拓コース」と「生活文化コース」が設置され、農業科は「生物科学科」として設置された。

すべての学科コースにおいて、1年次では基礎学力の定着のための少人数講座や習熟度別学習、特別学習期間を実施している。

#### ① 学びの開拓コース

大学進学を視野に入れ、進路特別講座や少人数指導により生徒の個性や特性、意欲を伸ばしていく。

#### ② 生活文化コース

実務的な応用力を身に付けさせることを目標に、簿記や情報処理の資格取得、パソコン活用能力の向上、保育や調理などの学習、着付や礼法などの実践的教育を行う。

#### ③ 生物科学科

大和茶を中心とした作物や地域の気候を利用した野菜・草花の栽培方法、造園に関する知識や技術、イヌを中心とする社会に貢献できる動物の飼育方法等の学習や実習を行う。



### (2) 山高活性化プロジェクトチーム

県立学校再編計画を受け、魅力ある学校づくりを組織的に進め、中・長期的な視野に立った本校の未来像を模索するため、平成24年度に「山高活性化プロジェクトチーム」を結成し、チーフとして議論や提言をする場

を設けた。この中で検討され、現在本校が準備を始めている特徴ある取組には次のものがある。

① 「山高茶論（やまこうさろん）」の開店・開業

本校で栽培しているお茶にこだわり、和菓子を開發し、地域社会に発信し、地域のつながりを大切にする大和茶カフェ「山高茶論」の開店・開業を行う。



② スーパーサイエンスハイスクール連携校

国の事業であるスーパーサイエンスハイスクール連携校として、科学技術に関する創造性や独創性を高め、大学や研究機関等と連携し、地域の特色を生かした課題研究など様々な取組を積極的に行う。現在、奈良教育大学と協定を結び連携を行っている。

③ その他地域連携事業への参加協力

「地域と共にある学校づくり」の取組として、スーパーサイエンスハイスクール連携生徒による地元小中学校への「出前授業」の実施や、本校の緑茶等の販売など地域の観光・文化施設で実施される行事への運営協力などを行う。

④ NPO法人の設立

地域の振興を図ることを活動目的としたNPO法人の設立を現在準備している。

## 2 成果及び課題

特色ある学校づくりを目指して具体的方策を様々検討したことにより、教育課程編成委員会・入試選抜委員会・教科主任会など既存の教職員組織がより活性化し、様々な取組の現状把握と諸課題の抽出を積極的に行うことができた。そして、近年の入学志願者数の定員割れを改善する具体的施策として、学校要覧、学校案内、学校ホームページなどの資料の充実や学校説明会や中学生の体験入学など、外部への情報の提供を積極的に行うことで、これらすべての取組を、中学校をはじめとして地域の方々にも広く知っていただくことができた。

その結果、特色選抜については、学科改編初年度の平成25年度入学者選抜で、過去2年連続して募集人数の50%にも満たなかった出願者数が90%を超えた。また、近隣中学校からの入学生徒数も減少が続いていたが回復傾向となった。平成26年度入学者選抜でも84%の出願者数となり、2年連続で80%を超えるという大きな成果を上げることができた。しかし、生徒数が増加する一方で、学力面に不安を持つ生徒や、不登校等で特別支援が必要となる生徒が増えている現状もあり、入学後の学力定着への工夫や学校生活への支援が今後の課題である。また、地域連携事業についても、活動が一部生徒にとどまることなく、より多くの生徒が関わり、生徒一人一人が地域の力を借り、生き生きと活躍できる場を見つけられるよう、今後一層の努力が必要である。

## 1 実践内容

本校に着任する以前、御所東高等学校で勤務していたが、そのときに御所実業高等学校環境緑地科の開設準備に関わった。開校と同時に御所実業高等学校に異動し、環境緑地科長となったが、新設学科の生みの苦しみと共に、学科を作り上げるという充実した日々を過ごす中での様々な経験が、現在の自分の原動力になっていると実感している。本校には平成22年4月に着任し、環境デザイン科長として魅力ある専門学科づくりを目指して、組織力を強化することによる学科の特色化に向けて取り組んできた。



本校は「実践型教育」で次代に必要な人材を育てることを目指している。学科としては「21世紀を生き抜く人材を送り出していく学科」を目標に掲げ、学科の教員間では「日本一の造園の学科にする」という合い言葉を掲げている。生徒に高校の3年間という短期間で様々な造園技術を身に付けさせるとともに、人間力を高めさせるための教育実践を報告する。

### (1) 学科の基盤づくり

#### ① 教員の技術力向上

農業系学科は分野が多岐にわたるため、教員が各々の専門分野外の授業・実習を担当することも多く、環境デザイン科においても同様の状況であった。そこで、学科を担当する教員が様々な実技研修会に参加するための働きかけを行った。また、教員間で技術の共有と継承を重視し、「わかる」→「やる」→「できる」といった実践型教育の手法を教員が実践した。この取組は現在も継続している。



教員研修の様子

#### ② 外部団体等の助成事業活用

「造園」分野の強みを生かし、奈良県緑化推進協会・日立環境財団・日本環境協会の助成事業や、奈良県の地域での「花いっぱい運動支援モデル事業」「公共施設での花いっぱい運動事業」等に応募し、庭づくりや花壇づくりによる地域環境に貢献する取組を継続して行っている。これらの取組は、生徒の活躍の場となることはもちろん、技術力が身に付く、技術力向上のための道具や資材が充実するなど、学科運営における原動力にもなっている。

### (2) 学校経営戦略「生徒を輝かせるしかけづくり」の具現化

環境デザイン科では、授業・実習で身に付けた知識・技術を発揮する機会として、技能検定（造園工事作業）やトレース技能検定等の資格取得にチャレンジさせてきた。

この中で、より高度な技術習得を目指す生徒が増加したため、新たなステップとして、上級資格への挑戦や技能五輪全国大会（青年技能者の技能レベルの日本一を競う技能競技大会）への出場を目標とした。また、学校敷地内における庭づくりや整備に加え、第27回全国都市緑化フェア、第60回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会、田原本町駅前活性化プロジェクトにおける庭園施工、うだアニマルパークや奈良県立大学敷地の設計等、生徒たちが身に付けた技術を学校内外で発揮するための「生徒が輝ける場」を積極的に設定した。



### (3) 教育活動の魅力を感じさせる情報発信

生徒たちの生き活きとした教育活動を魅力ある情報として発信することに努めた。具体的には、本校ホームページの頻繁な更新によるタイムリーな情報発信のほか、報道機関（テレビ・新聞）、奈良県ホームページ、日本学校農業クラブ専門情報誌「リーダーシップ」、田原本町広報紙、造園関係広報紙への取組の掲載が挙げられる。

## 2 成果及び課題

教員の技術力向上に向けた取組を行うことで、活発な意見交換等を通して、チームワーク力向上、組織力強化につながった。学校経営戦略「生徒を輝かせるしかけづくり」の環境デザイン科での成果は以下のとおりである。

- 技能五輪全国大会（造園競技） 学生の一部 最優秀賞 2回
- 技能検定（造園工事作業） 2級 平成23年度：1名 24年度：4名 25年度：3名
- トレース技能検定 2級 平成23年度：1名 24年度：12名 25年度：10名

このほかにも、日本学校農業クラブ全国大会や全国造園デザインコンクールで、毎年優秀賞等を受賞している。また、これまで放課後は、当番の生徒が灌水等の日常管理を行っているだけであったが、これまでの取組が上級生から下級生へと引き継がれ、より高度な技術を身に付けたいと希望する生徒が、自主的に放課後を利用し練習するようになった。今では、生徒たちや教員の意識を改革することで、活気ある学科になったと実感している。その結果として、造園に興味をもって入学する生徒の割合、また、関連産業への就職、関連した学校への進学者が年々増加している。

専門学科の魅力を継続発展させるためには、学科教員個々の指導力に任せるのではなく、学科教員間の技術の共有と継承や、教員が一丸となり取組を進めることを意識することが必要である。また、これまでの取組について見直し、改善するPDCAサイクルを常に行うことで、スピード感のある学科運営を心がけ、マンネリ化しないよう常にチャレンジしていくことが重要であると考えます。

## 3 その他参考となる事項

奈良県立磯城野高等学校ホームページ <http://www.nps.ed.jp/shikino-hs/>

## 1 実践内容

本校バスケットボール部は数十年の歴史があり、過去には10数回全国大会に出場するなど伝統と実績のある部である。しかし、ここ15年近くは全国大会出場をあと一步のところまで逃しており、何とか全国の舞台上で生徒たちと一緒に戦いたいという強い思いを持って本校での指導を始めた。ただ当初は十分な成果を上げることができなかった。どのようにしたら強くなれるのか。どのようにしたら勝つことができるのか。自分の中で答えが出ない状況が続いた。毎年、素晴らしい能力と可能性を持った生徒たちが入学してくる。しかし、今の自分のままでは生徒たちに勝つ喜びを味わわせることができないと、悩みながら指導していた。その中で、練習方法はもとより、生徒たちのバスケットボールへの思いや学校生活に対する姿勢までも視野に入れ、指導の在り方を大きく見直さねばならないと考えた。まずは、自分自身が今の状態からすべての面で変わり、生徒たちに「自ら考える力」を育成することができるよう、指導方法を次のように工夫していった。



### (1) 生徒たちとの関わり方を変える

今までの自分は、自分自身のバスケットボールに対しての知識や経験をそのまま生徒たちに押しつけていた感があった。生徒たちのよさを引き出し、力を発揮させるためには、本校全体に脈々と受け継がれてきた「自主創造」の精神をこれまで以上にチーム作り等に生かしていくことが一つの方法ではないかと考えた。そこで、体育館の内外を問わず生徒たちと話す機会を積極的にもち、生徒たちの目線に立って接することで、生徒とともにチーム作りをするように心がけた。そうすることによって、生徒たちが自ら考え、積極的にバスケットボールに取り組む姿勢が育っていった。

### (2) 奈良高校のカラーを全面的に出す

チーム作りにおいて、一番大切にしていることが、「奈良高校のカラー」を全面的に出すことである。他校のまねをするのではなく、本校としてのよさを出すようにした。学業との両立の中で、限られた練習時間で最大限の力を発揮し、生徒たちが自ら考え、自ら答えを出し、チーム全員で自分たちのチームを作っていくという、本校に合ったチームカラーを見つけ出し、そのカラーをチーム全員で徹底するようにした。ほんの小さなことであっても、チームの中で自分たちで決めた約束事は、徹底して行うようにした。徹底することによって、奈良高校のカラーが、より一層、明確になった。そのことが、生徒たちによって受け継がれるようになり、奈良高校男子バスケットボール部の一つの新しい伝統になってきている。「徹底する」ことほどチームにとって強いものはないと感じている。



### (3) 生徒たちの学校生活に対する考え方を考える

本校に赴任した当初は、生徒たちの体育館での姿しか見ていなかった。高校生のベースは、学校生活、学業にあるという原点に立ち返り、毎日の授業に臨む姿勢、学校内外でのあいさつ、掃除の仕方など、生徒一人一人の学校生活に目を向けるようにした。特に学業については、毎日のミーティングの中で、部活動との両立や時間の使い方について指導を続けた。また、バスケットボール部のOBの方にも協力を願った。例えば、会社の経営者である先輩を招き、今、企業でどのような人間を必要としているか、高校生のときに何をしておくべきかなどについて話をさせていただく機会を設けた。現役の大学生にも来てもらい、大学での授業や研究についての話などもしてもらった。このような指導を継続することによって、生徒たちが自ら自分の将来に向けて考えるようになり、前向きに計画的な学習をする習慣を身に付けるようになった。さらに、部活動においても、コートの中で今どのようにプレーすればよいかを自ら考えさせるようにした。なぜ、今のプレーを選択したのか、周りにどのように動いてほしいかなど、積極的に自分の考えを出し合える雰囲気をつくるように心がけた。

以上のように、奈良高校での3年間のバスケットボールを通して、日々成長し、「自ら考える力」を生徒たちに身に付けさせたいと考えている。さらに、生徒たちにとってはあつという間の3年間であるが、その一日一日を大切に、仲間と一緒に輝きのある時間を過ごしてもらいたいと願っている。

## 2 成果及び課題

平成21年度奈良県高校新人大会、平成22年度奈良県高校新人大会で優勝。平成22年度全国高校選抜、平成23年度全国高校総体、平成26年度全国高校総体で全国大会への出場を果たした。特に平成22年度全国高校選抜においては、1回戦を突破し、2回戦では準優勝チームと互角に戦うことができた。また、多くの生徒たちが、卒業後も大学等でバスケットボールを続けていることは、本校での部活動を通して得たことの大きさを物語っている。



今後の課題としては、部活動でのこれらの取組を学校全体での取組とするために、どのようなことができるかを考えていきたい。授業や学校行事、進路実現など、生徒たちが自ら考え、取り組むことができるように学校の中で何をなすべきなのかを考えるとともに、学級担任や校務分掌など、部活動以外の立場でも考えていくことで、教員としての自らの力量を高め、生徒たちとともに成長できるよう挑戦し続けていきたい。

## 3 その他参考となる事項

奈良県立奈良高等学校ホームページ <http://www.nps.ed.jp/nara-hs/>

## 1 実践内容

本校科学部では、生徒たちが設定したテーマにおける探究活動を、生徒たちの自主性を尊重しながらサポートしていくという形を取っている。実験ノートの書き方から、データのまとめ方、プレゼンテーションの仕方まで、一通りの手法を学び、通常、大学の研究室で行われる実験手法等も指導し、身に付けさせるよう努力している。探究活動を充実させ、生徒たち自身が科学する楽しさを実感し、大学進学後もさらに学び研究する意欲を喚起することも目標にしている。具体的には、次のような指導を行った。



### (1) 探究活動

#### ① 研究テーマの決定

生徒たちの興味・関心を重視し、研究テーマを生徒たちとともに決定する。高校生らしさを大切にしたいと考えている。その後、文献等の調べ学習に取り組みせ、実験計画を立てさせる。

#### ② 実験の実施

計画に基づき実験を行わせる。結果を考察し、実験の方向を軌道修正させる。

#### ③ 報告書の作成

#### ④ 発表する機会の確保

研究を発表する機会を与えられることで、研究結果をまとめるきっかけとしている。報告書にまとめることで見えてきた問題点について、解決方法を考察し実験させる。

### (2) 発表の機会

#### ① 本校文化祭でのポスター発表

#### ② 本校オープンスクールでのポスター発表

#### ③ 高校化学グランドコンテストへの応募

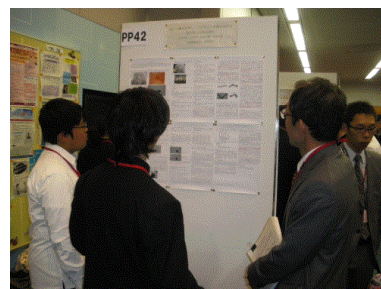
(大阪市立大学、大阪府立大学、読売新聞社主催)

#### ④ 日本学生科学賞への応募

(主催：読売新聞社、共催：科学技術振興機構)

#### ⑤ まほろば・けいはんなSSHサイエンスフェスティバルでのポスター発表

生徒たちは報告書やポスターへのまとめ方を少しずつ身に付けている。発表の機会を与えられ活動が評価されることは、生徒たちにとって大きな刺激となり、生徒たちのやる気につながっている。また、他校生との交流により、他校生の研究や発表に触れることで自らの視野を広げている。



### (3) 科学の魅力を伝えることへの貢献

#### ① 本校文化祭での演示実験

- ② 本校オープンスクールでの演示実験や体験実験
  - ③ 青少年ための科学の祭典奈良県大会への出展
    - 平成23年度 「色や模様をつけたコマを回してみよう」
    - 平成25年度 「重曹(炭酸水素ナトリウム)で入浴剤をつくろう！」
    - 平成26年度 「白黒写真の原理を学ぼう！」
- 自らの手で工夫を凝らすなどの積極性が見られ、とても貴重な経験をしている。



#### (4) 授業での実験との関わり

生徒たちは、実習助手の先生の指導の下、授業の実験の準備や予備実験にも積極的に取り組んでいる。その中で、試薬の調整や器具等の扱いにも慣れ、探究活動をスムーズに進めることに役立っている。また、予備実験での疑問等が研究テーマとなることも多い。

#### (5) 連携機関の活用

独立行政法人科学技術振興機構主催「中高生の科学部活動振興プログラム」に平成25年度より採択され支援をいただき、活動の活性化につながっている。連携機関とのネットワークの構築により、生徒たちだけでなく自分自身が先端の科学技術を知る機会となり、教員としての資質向上につながっている。また、予算的な支援により、関連書籍や実験機器、薬品を購入し、実験環境を整備し探究活動を充実させている。

## 2 成果及び課題

- 平成23年度 「青丹よし奈良北の青銅鏡 ～古代青銅鏡の再現を通して～」
  - ・第55回日本学生科学賞奈良県審査 最優秀賞受賞
  - ・第8回高校化学グランドコンテスト 金賞受賞
- 平成24年度 「電池の故きを温ねて新しきを知る！ ～電解液のゲル化～」
  - ・第56回日本学生科学賞奈良県審査 最優秀賞受賞
- 平成25年度 「単分子膜を利用してアボガドロ数を求める」
  - ・第57回日本学生科学賞奈良県審査 最優秀賞受賞
 「カタラーゼの実験」
  - ・第57回日本学生科学賞奈良県審査 優秀賞受賞
- 平成26年度 「アサガオの花の色は朝・夕でなぜ変わる！  
～アントシアニンの利用～」
  - ・第58回日本学生科学賞奈良県審査 優秀賞受賞

生徒たちの様々な探究活動を指導していくには、自分自身が未熟であり十分な指導ができていない。生徒たち自身が科学の芽を育てていくサポートができるよう、スキルを磨きたい。また、連携機関を最大限に活用していくことが今後の大きな課題である。高等教育機関との連携により、高度な実験観察器具・機器を取り扱う機会も設定したい。

## 3 その他参考となる事項

奈良県立奈良北高等学校ホームページ <http://www.nps.ed.jp/narakita-hs/>  
 高校生・化学宣言5 著者：中沢浩 出版社：遊タイム出版

## 1 実践内容

専門高校における産業教育は、有為な職業人を育成するとともに、望ましい勤労観・職業観を育成し、豊かな感性や創造性を養うことで、総合的な人間教育を行うという大きな役割を担っている。そのため、専門高校の生徒の学習意欲を高め、新たな産業教育の在り方を探り、新しい時代に即した専門高校になるよう産業教育の活性化を図ることは、産業教育に携わるすべての教員が取り組まなければならない課題である。これまでに自分自身が本県で実施してきた産業教育において、次のような取組を行ってきた。



### (1) 奈良県産業教育フェアでの取組

平成17年度、吉野高等学校在籍時に「第14回奈良県産業教育フェア」事務局長、平成20年度、奈良工業高等学校（現奈良朱雀高等学校）在籍時に「第17回奈良県産業教育フェア」事務局長、平成25年度、本校にて「第22回奈良県産業教育フェア」事務局長と3回の事務局長を担当し、多くの関係者の協力もあり、フェアを無事成功に導くことができた。各部会間の調整や開催までの準備作業にかかる進行管理、外部への啓発活動等に関わることを通して、フェアそのものの課題や今後の方向性について、多くのことを感じるとともに深く考えるきっかけとなった。そして、関係者間で検討を重ねたことは、今後の産業教育の振興にとって大変重要であり、有意義であった。今年度（平成26年度）のフェアから学校開催を取り止め、大型商業施設での開催となったことは、これまでの反省や検討による成果の一つと考えられる。



### (2) 奈良県産業教育振興会での取組

平成21年度より奈良県産業教育振興会事務局が本校に設置され、各専門学科から担当者を出し、役割分担をしながら振興会事務局の業務に当たっている。その中で、平成24年度からは事務局のまとめ役に当たる総務関係の仕事を担当している。産業教育振興会における校内委員会、企画委員会、理事会、総会などにおいて、企画・立案から準備、当日の運営まで関わっている。奈良県の今後の産業教育にとって何が大事なのか、また何をしなければいけないのかという未来の姿について検討していくよい機会であると考えている。

### (3) 奈良県工業教育研究会での取組

平成22、23年度に奈良県工業科学学習指導研究会の研究発表を本校にて行い、研究委員として準備に携わった。平成23年度には学習指導研究会工業部会の研究委員長とな

り、研究主題「工業に関する学科における新しい学習指導要領に対応した学習の在り方」に基づき、高等学校工業科における学習指導上の諸問題について研究協議等を行う取りまとめを行った。新しい学習指導要領の理念を実現させるため、体験活動の充実や職業人としての倫理観の育成などについて研究を進める中で、県内の多くの教員と、奈良県における工業教育の在り方について、方向性や課題等を共有するよい機会となった。

## 2 成果及び課題

3回の奈良県産業教育フェア事務局長を担当し、それぞれにおける反省点や改善点を、次回のフェアにつなぐことができた。産業教育振興会では、振興会自体の活性化を図るとともに、企業や大学等へのアプローチを積極的に行うことが、今後の産業教育にとって重要であることを認識することができ、具体的な取組を進めるための検討も行っている。



今後の課題としては、産業教育にかかわる教員一人一人の資質を高め、意識を向上させるために、上記の取組をどのように発展させていくのかを、周りの教員とともに検討していきたい。

## 3 その他参考となる事項

奈良県立奈良朱雀高等学校ホームページ <http://www.nps.ed.jp/ns-hs/>